「文化を培うこれからの国土交通行政を考える懇談会」

中間とりまとめ

平成１９年６月

目　次

● はじめに

● 日常の中での文化を培う

（1） 文化とは暮らしの立て方

（2） 日常生活の舞台の設え

（3） 暮らしの中の文化

（4） 過去から未来への継続性

● 日本人の感性に根ざした新たな文化を培う

（1） 文化的豊かさや景観の美しさを軸にした国づくり

（2） 日本発の新たな文化の創造

● 人や文化の交流を促進する

（1） 交流からうまれる文化

（2） 交流を育む基盤づくり

（3） 交流を育むライフスタイル

● 文化で地域を活性化する

（1） 地域住民との協働による地域づくり

（2） 文化政策の新たな潮流

（3） 都市・産業・文化政策の融合による都市の再生

（4） 協働を通じた新たな文化の創造

● 将来の文化を培う人を育む

（1） 次世代を担う子ども

（2） “目利き”の育成とリーダーシップ

（3） 優れた技術者・技能者の育成

（4） 挑戦への支援

（5） 行政のあり方

● 文化と国土交通行政 【村上座長】

（1） 地球環境問題と文化

（2） ここで取り扱う「文化」の枠組みについて

（3） グローバリゼーションと文化

（4） 文化と国土交通行政

＜資料1＞ 文化を培うこれからの国土交通行政を考える懇談会 メンバー

＜資料2＞ 文化を培うこれからの国土交通行政を考える懇談会 開催経緯

はじめに

我々が暮らすこのまちは、憩い、遊び、働き、学ぶ日常生活の舞台である。

長い歴史の中で培われた文化や伝統に支えられこの舞台は形成されてきた。そして、その舞台は、新たな文化を培う基盤でもある。

国民の心の豊かさやゆとりのある生活を実現するとともに、今後の我が国の経済的な活力の維持増進や地域の活性化を図っていく上で、文化は重要な要素である。

経済的な豊かさを実現し、将来に対しての投資余力のある今、経済的効率性や利便性だけを追求するのではなく、美しさ、素晴らしさなどに対する価値観を一人ひとりが共有し、次世代に誇ることのできる良質なストックの形成などを通じて、我々が暮らすこのまちを、文化的に豊かで質の高い空間として整備していかなければならない。

さらに、そこでうまれた新たな、日本独自の文化が世界中に発信され、我が国が、経済力のみならず文化の面でも優れた国としての評価を受け、国際社会で確固たる地位を築くことが求められている。

我々は、文化の薫りのする国づくりを目指さなければならない。

都市政策や交通政策、産業政策など様々な分野において、文化の創造や継承に取り組むことは重要な課題となる。

２０世紀は、科学技術の発展により大量生産・大量消費が行われるようになった時代である。結果として、先進国では、物質的には非常に豊かな生活を人々が享受できる社会ができあがってきた。しかし、２０世紀の後半からは、地球温暖化現象をはじめとして、地球規模で環境問題が発生しており、資源の浪費による天然資源の枯渇や大量廃棄物の問題、さらには生態系の破壊、

生物多様性の喪失など、様々な危機に我々は直面している。大量生産・大量消費社会の見直しは否が応でも我々が取り組まなければならない喫緊の課題である。

このような中で、21世紀には、環境問題への適切な対処を行いつつ、現在の豊かな生活を維持し、長期的にも社会経済の活力を維持する持続可能な社会を実現しなければならない。大量生産・大量消費社会の見直しにあたって再認識されるのが精神文明の重要性であり、それを支えるものが文化である、ということもできる。

このような問題意識を背景に、昨年11月、「文化を培うこれからの国土交通行政を考える懇談会」を設置し、有識者からの講演などを通じ、従来の枠にとらわれず幅広い観点から、文化の創造や継承に向けた行政のあり方について検討を行ってきた。なお、「培う」という言葉には、育てるだけでなく「新たにうみ出す」という考え方も込められている。

この中間とりまとめは、これまでの検討内容を踏まえ、

- ✧ 日常の中での文化を培う
- ✧ 日本人の感性に根ざした新たな文化を培う
- ✧ 人や文化の交流を促進する
- ✧ 文化で地域を活性化する
- ✧ 将来の文化を培う人を育む

という5つの視点に立って、懇談会の場での講演者や懇談会メンバーからの意見をとりまとめたものである。また、最後に、「文化と国土交通行政」という視点で村上座長から寄稿していただいている。

国土交通省では、これまでに、「文化を守り育む地域づくり・まちづくりの基本方針」（平成8年6月）や「美しい国づくり政策大綱」（平成15年7月）を策定し、「文化」や「美しさ」を行政の内部目的化するなどの基本的考え方を示し、それぞれの事業の実施に際しての取組や、景観法の制定など一定の成果をあげているところである。しかし、これまでは、歴史的な文化を保全・再生する

ものが中心であり、本懇談会で議論された「日常生活の中での文化」、あるいは新たな文化を培う、という視点は、これまであまり見られなかったのではないか。

本懇談会では、このようなこれまでの取組を踏まえつつ、行政として対応しうる施策というような枠にとらわれず、文化という観点から幅広く意見交換を行ってきた。このため、網羅的にテーマを取り上げることはできず、今後さらに検討を深めるべき分野が存在するところであり、国土交通行政、あるいは行政全体としてどのような取組を行うべきかなどについて、引き続き検討を重ねることが望まれる。

この中間とりまとめに記載されている内容は、国土交通行政の分野にとどまらず、広く政府全体の今後の取組に関する重要な示唆に富んだ意見が多数あったと認識している。今後、この中間とりまとめをきっかけに、各分野で検討が重ねられ、文化を培うための諸施策がさらに展開することを期待するところである。

日常の中での文化を培う

- 従来、伝統的建造物や美術工芸品などの文化財や祭りなどの伝統芸能に関連することを文化だと理解してきたが、文化とはもっと広い概念であり、これからは、日常の中での文化に力点を置くべきである。
- 建築やまちづくりの分野において、日々の暮らしや人々の人生を豊かにするための、美しさ・デザイン性など感性に訴える様々な価値を満たすことが求められている。
- 人々の日常生活の舞台が精神的にも豊かなものであり、生活文化を育むものとなるよう、暮らしの質を高めることを目指すべきである。また、地域の日常の文化が魅力的であることが観光にもつながる。
- 美術館などを日常生活の中で気軽に利用し、そこで人々が交流することが必要である。人が文化をつくるのであり、人の集まるところに文化は育つ。
- 日常生活の中で歴史の連続性を感じられることは重要であり、古い建築物を上手く再利用し、現代に活かすという視点も重要である。

（1） 文化とは暮らしの立て方

文化とは、それぞれの暮らしの立て方（Way of Life）である。目に見えるもの、目に見えないものからなる暮らしの立て方である。

古くからの日本の家屋では、軒を大きくとり縁側を作り、障子などで広い開口部を設け、環境と調和した構造となっていた。家に入るときには靴を脱ぎ、畳の上で過ごし、食事の際には卓袱

台で箸を使って食事をし、布団で寝る。室内には和紙や竹を使った装飾品などを置き、桐などの木を用いた箪笥に衣類を収納する。このような衣食住を成り立たせているもの、その様式が文化である。

近年、若者を中心に、日本の伝統文化への関心が高まっているのではないか。例えば浴衣を着る若者は増加の傾向にあるし、装飾などを和風にした居酒屋の増加という現象も見られ、将来は歴史と伝統のある街に住みたいという希望を持つ若者も増加しているようである。かつては着物といえば、冠婚葬祭などの儀式の際にマナーに従って着なければいけないという雰囲気が強かったが、最近の若者は着物の生地を使った服を現代風に着こなすなど、その良さを取り入れている例も見られる。

過去の様式に一方的に回帰する必要はなかろうが、最近の若者の間に日本の伝統美の良さを現代に合わせて自由に楽しむ傾向が現れているように、日本人の暮らしの立て方としての文化についてあらためて考えるべきときに来ている。

従来、伝統的建造物や美術工芸品などの文化財や祭りなどの伝統芸能に関連することが文化である、という理解が一般的であったが、文化とはこのようにもっと広い概念であり、文化を培うこととは、すなわち我々の日常生活のあり方の質を高めることである。

歴史的な文化だけではなく、日々の生活の中で生きている文化、さらには様々な活動を通じてこれから生成されようとしている新たな文化についても着目していく必要がある。

（2） 日常生活の舞台の設え

我々が暮らすまちは、我々の日常生活の舞台である。そこは、これまでの長い歴史の中で培われてきた、地域固有の伝統や文化に支えられて成り立っている。暮らしの立て方が文化であるとするならば、我々の住むまち、我々の日常生活の舞台は、これまでの伝統や文化を踏まえた新たな文化を培う基盤でもある。

最近の日本の工業製品の中には、現代美術に通じるほど高いデザイン性を備えているものもあり、機能性・実用性だけではない、人々の感性に訴える質感が評価されているという。建築やまちづくりにおいても同様に、日々の暮らしや人生を豊かにするための、美しさ・デザイン性などの様々な価値を満たすことが求められているのではないか。我々が日常生活を送る上では、あるときには知的刺激を受けるような、好奇心を満たせるような要素が必要であり、また、心安らぐ憩いのある要素が求められる場合もある。単に機能性・実用性だけではない様々な付加価値が求められている。

例えば、京都や金沢のように歴史と伝統・文化が今でも息づいている街並み、倉敷や馬籠などのような歴史的な街並みや、六本木ヒルズや東京ミッドタウンのように高度に都市化された街並み、あるいは神楽坂や東京の下町のようにヒューマンスケール・等身大で人情にあふれた街などへの憧れもある。素晴らしいオペラハウスや美術館などの文化施設、歴史のある建造物、あるいは東京タワーのようなランドマーク、外国では、例えばロンドンのビッグベンやパリの凱旋門など、各都市のシンボルとして皆が誇りに思っている施設もある。セントラルパークやハイドパークのように緑のあふれた空間、富士山やアルプスなどの山々、青い海などの自然的な景観も重要であろうし、さらには、そこに暮らす人々のホスピタリティ、コミュニケーションなどもあろう。

このような様々な要素を考えながら、ソフト・ハードの両面から、日常生活の舞台について、文化性の豊かな空間として環境を整備し、暮らしの質を高めることを目指さなければならない。地域の日常の文化が魅力的であることは観光にもつながるのである。

（3） 暮らしの中の文化

フランス語で、アール・ドゥ・ヴィーヴル（Art de Vivre）という言葉がある。そのまま訳せば「日常の中の芸術」ということになるが、美術館や博物館の中だけの存在ではなく、日々の暮らしの中に芸術・文化がとけ込み、それを楽しむことで、豊かな生活を送ることができる。

かつて、モディリアーニやシャガール、藤田嗣治などエコール・ド・パリの画家や、ボードレールやヴェルレーヌなどの詩人、そのほか様々なジャンルの芸術家たちは、毎日のようにカフェに集い、芸術論を交わしたり、憩いの場としたりしながらお互いに刺激を受けていた。金がない画家はコーヒー代の代わりに絵を置いていき、店長はそれを店に飾ったとのエピソードもあり、今でもカフェにはたくさんの絵が飾られているという。

我が国でも近年、道路などの公共空間などを活用したオープンカフェが目立つようになってきており、かなり人気の高い店もあるようである。オープンな空間、外気に接することのできる空間は、たとえば春になったら春風が吹く、冬になったら木枯らしが吹く、そういう自然の営みと一体になった幸福感が得られる貴重な空間である。

芸術は、これまで狭い意味での文化と理解されてきており、日常生活とは切り離された存在であった。美術館や博物館、あるいはコンサートホールに行くのは、非日常的経験であり、仕事や学校の帰りによるものではなく、休日などにあらためて出かけていく場所であった。そのためか、それらの施設が、まちの中心部から離れて周囲の街との連続性がない中に立地しているケースも多く、また、美術館や博物館は、平日に通勤者が利用することを想定した運営時間とはなっていない例が多い。

ハレの世界の芸術も重要である。素晴らしいオペラを楽しむのには、日常と切り離された雰囲気や舞台設定が必要なこともある。しかしながら、それらの芸術が常に日常生活と切り離されていてはいけない。美術館やコンサートホールは、人々の交流の場でもある。芸術というのは日常生活から切り離されたものではなく、生活の中でも感じられることが重要である。通勤通学時に芸術を楽しめることが真の豊かさにつながる。金沢２１世紀美術館は、「市民の中にある市民の応接間」という考え方に基づき、入口の数を多く設け、無料で利用できるフリーゾーンを設けたり、開館時間を夜の１０時までとしたりするなどの運営を行った結果、オープンしてわずか2ヶ月で来館者が３０万人、２年あまりで３００万人を超える人気を博している。

人が文化をつくるのであり、人の集まるところに文化は育つのである。

（4） 過去から未来への継続性

イギリスでは、古い建物を壊さずにそのまま再利用する、いわゆるリノベーションという考え方が多く採用されている。例えば、使わなくなった駅があると、それを壊すかどうかではなく、どう再開発し再利用するか、ということについて知恵を集めているし、新たに建築する場合でも、外観は従前と全く同様にしたうえで内部だけ新しくしている例もある。ロンドンでは、ローカル・アメニティ・ソサイエティ、市民の自治組織が街並みや看板などについてのいわば紳士協定をつくり、それを守るとの国民的コンセンサスの下、歴史的な街並みが現在でも維持されている。そのような意識に基づいた取組が継続している結果、１９世紀後半に出版された町のガイドブックが復刻され、その本を片手に現在の街を歩きながら、その時代の歴史的な建造物なり街並みを確認するという素晴らしい経験をすることができる。

我が国では、我々が現に見ている風景と、父母の世代が見ていた風景、祖父母の世代が見ていた風景に連続性がない。その結果、歴史というものがその地域における環境の非常に大きな要素であることを忘れがちになる傾向にある。何代も前の人と現代の我々が同じ風景を見ていることに歴史性があり、過去から未来への地域の連続性に人々が思いをめぐらせることができるのではないか。

歴史的な建築物を保存しているとしても、映画のセットのようになっており、実際に人が住み、生活していること、あるいはその経験ができること、という視点が欠けている。

イギリスでは、『ランドマークトラスト』というトラストがあり、産業遺産のようなもの、例えば駅舎や古くなった水道の配水塔、島の漁業のための見張り小屋などを壊さずに中をすっかりリノベーションし、一般のホリデーハウスとして安価に貸し出すという活動をしている。その創始者であるジョン・スミスは、次のように述べている。

「私たちは壊れかかった建物を救いあげて、それらをホリデーのための宿泊施設として一般に貸し出すことによって、いまによみがえらせ、未来を与えようとするものです。そのようにすれば、さまざまな人々の手で歴史的な、あるいは重要な建築物を絶えず継承していくことができるわけです。たとえそれがほ

んの短期間の滞在だとしても、そこに実際に住んでみるという経験によって、人々はただ外から眺めるだけということに比べて、はるかに多くのことを得ることができるでありましょう。しかも、そこで休暇を過ごしながら、いろいろなことを学ぶことができる。その建物がずっと古いものであれ、あるいは比較的近時のものであれ、実際に住んで朝昼晩、あらゆる光の中で、また晴雨寒暖さまざまな天候の中で、またそのあたりの暮らし方のコツをつかみながら」

京都では、表向きは伝統的な町屋の外装を保存しつつ中はフレンチやイタリアンのレストランとして、日本的なものと洋風生活を上手く調和させている例もある。このように古いものを単に守るのではなく生活の中で心地よく利用していく仕掛けの方策についても着目していかなければならない。

また、伝統的な街並みと近代的な都市との共存を景観上実現させるための道具として、都市の中での光をうまく活用することができないか、との考えがある。近代的ビルと古い建築物とは、物理的に制限のある一定の都市空間の中で、視覚環境が大きなウェイトを占める昼間は景観上も文化上も同居はなかなか困難である。しかし、夜は、人工的に光を構築することで、つまり、どこに光を当て、どこに当てないか、などを考えることによって、物理的な空間とは異なる都市構造を浮かび上がらせることが可能となり、その結果として、伝統と近代の共存を図ることができるのでは、との考えである。

古くなった建築物はすぐに壊し、集積化・高層化する傾向があるが、あらゆる場所でその取組を行うことを許容していいのか、その必要性が本当にあるのか、考え直すべき時に来ている。建築物を取り壊して、その街の雰囲気にそぐわない新たな建築物を建てる光景が、現在、日本の至るところで見受けられるが、壊すことに対して規制がない現実に目を向け、あらためてその是非を検討する必要がある。

我が国では震災や戦災に遭い、また、建物自体に求められている耐震性能などの基準が外国とは異なるため、もちろん全く同じ取組を行うことには困難も伴うが、まちづくりに当たって、過去からの継続性、という視点は重要ではないか。

街のたたずまいに込められた精神のあり方や生活のあり方こそ次世代に伝えていくべきなのである。

また、建築物だけではなく、我々の生活環境を取り巻く自然についても同様に考える必要がある。現在、東京湾の三番瀬など全国各地で自然を再生するための取組が行われているが、失われた自然を取り戻し、生態系も含めてかつての自然環境を再生すること、そのこと自体も非常に文化的な営みであり、自然再生をうまく計画や設計に活かすという視点が必要である。

我々が生活する空間に存在するもの、建築物であれ自然であれ、それらについて自分たちが責任を持って次世代に何かをプラスして受け継いでいく、長期的な視点に立って自らが生活する地域に責任を持っていく、という姿勢が求められている。

日本人の感性に根ざした新たな文化を培う

- これからの国づくりは、利便性やコストの追求のみならず、文化的な豊かさ・景観の美しさという価値を基軸に置く、というパラダイムの転換が必要である。そして、未来の文化資産ともなるような優れたストックを創るべきタイミングにある。
- 日本人は古来、自然に基礎を置いた美しさに対する感性・美意識を大切にし、庭園や建築、華道や茶道などを通じて感性を培ってきた。このように数値化できない価値をあらためて共有することが必要である。
- 建築や音楽、ファッション、アニメなどの日本の文化が海外で高い評価を受けている。海外からの視点なども通じて日本の良さを再認識するとともに、新しい日本のスタイルを確立し、日本発の新たな文化を創造することも重要である。

（1） 文化的豊かさや景観の美しさを軸にした国づくり

幕末から明治期に日本を訪れたアーネスト・サトウやラフカディオ・ハーンをはじめとする多くの外国人から指摘されたように、当時の日本は、外国人の目から見たとき、清潔感にあふれ、自然との調和が図られた優れた景観を有する国であった。

その後は、軍事力に主軸を置いた国づくりを推進した時代を経て、第二次世界大戦後は、経済的な発展に中心的な価値を置いてきた。その結果、未曾有の高度成長期を経験し、我が国はGDPで世界第２位の経済大国へと発展したが、一方では、その間に、経済的効率が優先されるという歴史的潮流の中で、多くの貴重な景観を失ってきてしまった。例えば、都市内に高層ビルが無秩序に乱立し、空中を縦横無尽に走る電線や、色彩にも形状にもルールがなく無秩序に掲げられている屋外広告物があふれているなど、外国人の目から見ても、総じて、日本は清潔ではあるものの雑然としている、という指摘を受けることが近年多くなってきたと思われ

る。

２０世紀も終盤になると、やっと、美しい国土・地域・まちをつくることの重要性が人々の意識の中に浸透し、全国各地で、景観を保全するためのまちづくり条例の制定や、国における景観法の制定、あるいは市民レベルでの運動などが起こり、景観を守ることなどを目的としたNPO活動も盛んになりつつある。今後、このような動きが着実に、より一層広がっていくことが期待される。

これからはシーナリー（scenery　景観）が問われる時代であり、国づくりも、景観を軸にした地域づくりとして考えていかなければならない時代である。

古来より日本人は、自然というものに独特の感受性を持っており、自然に基礎を置いた美しさに対する感性・美意識を大切にし、庭園や建築、あるいは華道・茶道などを通じてその感性を培ってきた。

例えば、竜安寺や銀閣寺などをはじめとする日本の寺院建築は、建築物の存在を強く主張するのではなく、庭を際だたせるために建物がある、とも言え、自然との調和を第一に考えている。また、我が国の庭園は、敷地内だけを対象とするのではなく、遠景の山々を池に映すといった、人間の手の入っていない自然を借景として庭に取り込む手法を採用しているという特徴がある。

このような感性は、そもそも数値化できるものではなく、客観的な評価に馴染むものではない。しかしながら、このように客観的な指標で評価できないものの価値をどう受け取るか、かつて日本人は、茶道や華道などの文化、あるいは自然との関わり合いを通じて十分に身につけてきた。

経済的豊かさを達成した現在、これからの国づくりは、利便性やコストの追求のみならず、文化的な豊かさ・景観の美しさという価値を基軸に置く、というパラダイムの転換が必要である。そ

して、未来の文化資産ともなるような優れたストックをつくるべきタイミングにある。海外の諸都市の例を見ると、経済力が最も豊かであった時代に作られたストックが文化的資産となり、それぞれの国や都市のアイデンティティを形づくり、また海外から人を惹きつける観光資源ともなっている。そして、文化的な豊かさ・景観の美しさという価値を基軸においた国づくりを進める上では、日本人の自然に対する感性・美意識を再認識し、数値化には馴染まない価値観を一人ひとりが共有することが求められている。

（2） 日本発の新たな文化の創造

近年、映画や音楽、ファッション、アニメ、家庭用ゲームなどの日本の文化、特に若者を中心とする文化が海外で高い評価を受けている。

映画については、日本人映画監督による作品が高い評価を受けたり、あるいは日本映画がハリウッドでリメイクされたりしている事例も多数ある。ヨーロッパで開催されたアニメのイベント「JAPAN　EXPO　2006」は、３日間の開催で集客数約5万人を集め、フランスでは、アニメの出版社数約20社、アニメファン人口約300万人とも言われており、日本アニメ文化が定着している。家庭用ゲーム機は、ソフト・ハードをあわせた海外への総出荷額は2005年には1兆円に迫る勢いとなっている。

また、生活スタイルにおいても日本文化への注目度が高まっている。パリでは、日本の文化や伝統的なものが人気を博しており、例えば、漆のテーブル、布団、畳、障子、和紙など、日本ではどちらかといえば利用者が減少傾向にある文化が、フランス人の生活の中に自然に取り入れられる動きが見られる。また、日本を訪れる外国人からすると、ホテルではなく、和風旅館で畳と座卓、布団というスタイルに人気が集まる傾向にあるという。

このように、海外からの視点で評価された内容を、日本人が逆に発見して、そこから得られるエネルギーを、いま日本に持って帰ろうとしている動きが見られている。外国からの視点、外国の

経験を通じて、あらためて日本の良さを再発見することも大切である。

日本人の建築家が海外から高い評価を受けているが、これは、自然を愛し自然との調和を重視するという日本の文化・日本人の意識を基盤としつつ、新しいスタイルを創造しているからである、と言われることがある。また、最近の日本の工業製品には、価格面や性能面のみならず、日本的な感性に裏打ちされた素晴らしいデザインという付加価値があり、その点が高く評価されつつあるとも言われている。

このように、日本のアイデンティティを再発見し、新しい日本のスタイルを確立し、日本発の新たな文化を創造し世界に発信することも重要である。

近年、まちづくり・地域づくりにおいて、商品やサービスのマーケティング手法としてのブランディングを取り入れ、まちブランド・地域ブランドを構築しようとする試みが各地で行われているが、このような新たな日本のスタイルを確立することは、いわば日本ブランドを構築することであり、今後、我が国が経済的な活力を維持増進するための大きな要素ではないか。

人や文化の交流を促進する

- 我々にとっての既知の世界と未知の世界がうまく混ざり合い、それぞれの世界の間で、人やもの、情報が行き交うことにより、地域で培われた文化と他の文化とが交流し、新たな文化がうまれ文化をより円熟させることにつながる
- 文化や芸術をきっかけにした人の移動を促進することが必要であり、そのためには、移動自体に物語性を持たせることが考えられる。また、地域での文化的イベントの開催などを通じて地元と外部の人々とが交流することも効果がある。

（1） 交流からうまれる文化

「ローカルな世界」、身近な世界に対しては、我々は、ある程度の予見を持ちながら過ごすことができる。例えば、そこに住んでいる人がどういう人か、どこに行けばどのようなものがあるのかなど。そこでは安心して生活を送ることができ、その中で、その見知ったもの、昔からあるものを培い受け継いでいく、という営みが行われている。

一方、「グローバルな世界」、遠くの世界は、予想のできない未知のエリアであり、そこからもたらされるモノや人との出会いに対して、新鮮な驚きと感動を得ることができる。古来日本には浦島太郎やかぐや姫のような「まれびと伝説」というものがあるが、そこでは、未知の世界、新たなモノに出会う喜びなどが描かれている。

この「ローカルな世界」と「グローバルな世界」の二つ、既知の世界と未知の世界の二つがうまく混ざり合った状態、言い換えれば、一定の法則の下に必然の結果が出る状態でもなければ完全な偶然の状態でもない中間的な状態、これは「偶有性」と呼ばれるが、これが文化をつくり出す根源である。「ローカルな世界」の中のネットワークだけではなく、「グローバル」なネットワークも

同時に存在すること、「ローカル」であると同時に「グローバル」であるという性質を持っていることが必要である。

日本人は伝統的に、「ローカル」なモノを大事にしながら「グローバル」な新しい文物を取り入れることを大切にする、という取組が非常にうまかった。例えば、曜変天目茶碗のように中国では残っていなくて、日本にだけ残っていて国宝になっているようなものもある。外国から来たものも国宝にしてしまうという器量の広さ、見識の広さという特質を日本人は持っていた。

文化的な価値は、一つ一つの要素が孤立しているだけでは発生し得ず、必ず行き交いが必要である。人が行き交い、ものが行き交い、情報が行き交わなければそもそも文化はうまれない。単に人が移動するだけではなく、それとともに文化や精神性も一緒に移動することが必要である。

（2） 交流を育む基盤づくり

旅先での様々な経験や出会いを通じた文化の交流を描いた、いわゆるトラベルライティングと言われる書物や、主人公が道を移動しながら様々な経験を積んでいく映画（ロードムービー）などが存在する。

かつては日本にも、「奥の細道」や「東海道中膝栗毛」といった優れたトラベルライティングが存在したが、このような、移動しながら未知のものと出会うことの魅力・楽しさを伝え、そのようなライフスタイルについての人々の認知度を高めるためのツールが今後増えていくことが期待される。移動自体に物語性を持たせることにより、ビジネスや帰省など必然を充足させるためのものだけではなく、文化や芸術、未知の景観・風習などをきっかけにした移動が促進されることが必要である。

戦後、都市への人口集中などが急激に進行したため、地域の多様性をないがしろにしすぎてきた結果、全国に同じような形体を持つ都市空間が形成され、「グローバルな世界」、未知の

世界との出会いという移動の意味が失われてきているのではないか。

国づくりにあたっても、国土の美しさに関し、ある種の物語性を持たせ、点から線、さらには面に拡がったような文化的価値を創造することが必要である。

地域での文化的イベントの開催などを通じて地元と外部の人々とが交流することにより、文化や精神性が移動することもある。

例えば、軽井沢大賀ホールでは、初年度年間２２０回のコンサートを開催し、その後も使用頻度は非常に高い。これは、ホールの音響性能が高いことやコンサート内容が充実していることという理由だけではなく、新幹線というインフラの整備により、東京の人が気軽にアクセスできるようになったこと、さらには近隣に集客力のある大規模なショッピングセンターが立地していること、などの相乗効果であると考えられるが、結果として、東京と軽井沢の人の行き来が活発になり、また、一流の音楽家が軽井沢を訪れ地元の人と交流する、軽井沢に新しく複数のブラスバンドが結成され音楽文化がさらに成熟するなどの効果が現れている。

音楽を通じた同様の例としては、海外では、例えば、有名なザルツブルク音楽祭の際にオーケストラのメンバーが地元の普通の民家に宿泊し、地元の人と食事をしたり、地元の人をコンサートに招いたりといった交流が進んでいる。

ここまで、交流を育むためのソフト的な側面について述べてきたが、当然のことながら、上述の新幹線の例でもわかるように、人々の交流に資するハードとしてのネットワーク整備も重要である。日本人の移動は、最初の移動手段は徒歩、次に鉄道と汽船の時代があり、現代は自動車による旅の時代となっている。自動車による旅の時代にふさわしい、景観、環境、経済効率を考慮した、地域に即した交通システムの整備が求められている。

（３） 交流を育むライフスタイル

交流を推進するためには、人々のライフスタイル自体についても考えなければならない。

かつてイギリスでは、貴族が、一年の半分はロンドンで過ごし、残りの半年は田舎に住むというライフスタイルだったことにより、貴族の文化が伝わり、現在でも田舎にハイカルチャーが存在しているという。我が国における都会と田舎が、ハイカルチャーと自然、という二者択一的な風潮になっていることと対照的である。

現代の日本でこのようなライフスタイルをとることは、限られた人を除けば困難であるが、例えば、退職後、一年のうちの一定の期間や週末は田舎で過ごし、その他の期間は都会で過ごす、いわゆる「二地域居住」という動きも見られるところである。今後、このような動きの中で、人々の交流を通じた文化の交流が期待される。

都市的な文化と農村的な文化とは、本来、二者択一的な存在ではなく相互補完的な関係にある。農村的な文化は都市の人間にとって必要不可欠な存在であり、その文化を、都市の人間としていかにサポートしていくか、という視点が求められている。

また、イギリスでは、ギャップイヤーと呼ばれる制度がある。これは、高校生が大学に入学する前の１年間、ボランティア活動や旅をするなど自由に過ごせる期間を認める制度である。あるいは、キャリアギャップと呼ばれ、働いている人が一定期間ギャップイヤーを取得するものがあるが、このように、人生のあるタイミングで、一定期間自由に行動できる時間をとることで、人々の交流は促進され、それぞれの地域で培われた文化が他の文化と混ざり合い、新たな文化がうまれ文化をより円熟させることにつながる可能性がある。

我が国においては、外国の学校との交流などの観点から大学の９月入学という意見があるが、この取組は、高校から大学に進学する間に半年間のギャップを設けるという結果となり、ギャップイヤーのような効果ももたらすのではないか。

文化で地域を活性化する

- 地域の魅力の基本は、住民が地域に対して抱いている誇りと愛着である。それぞれの地域での暮らしの満足度を高めることが重要である。
- 近年、“創造都市”という考えが提唱されているが、それは、これまで人口や生産額などを競い合う都市だったが、個性や質の違いを認め合い、共存する都市になっていくこと、効率や経済性を重視した都市から人間性を重視した都市へと復活していくことである。
- 都市政策や産業政策と文化政策が結びつけられて議論されることが多くなっており、スペインのビルバオなど、かつての産業都市が再生されている例がみられる。
- 我が国では、金沢や横浜、越後妻有、香川県直島など、芸術・文化を通じたまちづくりを積極的に進めている例がある。ここでは、地元の人と、中心となるデザイナーやNPOとが徹底的に議論を重ね、協働から新たな文化が生まれてきている。

（1） 地域住民との協働による地域づくり

地域の魅力の基本は、住民がその地域に対して抱いている誇りと愛着である。それぞれの街に住む人々が、自らの街を誇りに思い、その街のために頑張る、という意識を持っていること、その地域に存在する固有の資産を大事にし、それを活かす、今あるものを活かす、ということが重要である。

魅力あるまちづくり・地域づくりのためには、統一性のあるコンセプトの下に街がデザインされなければならない。一つの意思・一つの感性に基づき、地道で着実な地元の人々との対話を通じて実現されることが重要である。

このような取組を、一過性のものではなく、継続性のあるものとすることが重要であり、そのため

には、経済至上主義的な視点ではなく、地域がどのくらい活性化されたのか、その街に住む人々にとって、そこでの暮らしの満足度がどれだけ上がったのか、地域に活力がどれだけ蘇ったのか、を考えるべきである。

近年、“創造都市”という考えが提唱されている。この考えは、これまで人口や生産額などを競い合う都市であった認識を転換し、個性や質の違いを認め合い、共存する都市になっていくこと、効率や経済性を重視した都市から人間性を重視した都市へと復活していくことである。

（2） 文化政策の新たな潮流

人間性を重視した都市への復活に向けた取組の中では、芸術・文化が大きな力を発揮しており、近年、新たな動きがうまれている。

文化は、教育、福祉、まちづくりに対して大きな力を発揮するもの、軍事力や経済力に対するソフトパワーである、と言われている。かつて芸術は趣味や鑑賞の対象であったが、近年、芸術でまちを変えていくということが起こりつつある。

また、文化政策の担い手の多様化も見られる。従来、公的な文化政策は、国や都道府県というところがやっていたが、芸術を対象とするNPOが非常に増えており、いま全NPOのうちの3分の1が学術、文化、芸術またはスポーツの振興を目的に掲げているとのデータもある。このような流れの中で、民間、公共、すべてが一体となって、「新たな公」という考え方で文化的な都市経営を行っていく時代になってきている。

さらに、文化政策というものが、とりわけ都市政策や産業政策と結びつけられて語られることが非常に多くなってきた。

バブル期の企業による活発なメセナ活動や美術館・博物館の建設ラッシュと、その後の衰退ぶりを目の当たりにすると、経済が芸術・文化を支える、という風潮が強いように感じられるが、そ

うではなく、かつての加賀百万石時代の金沢のように、芸術・文化が経済を支える、という構造が望ましい。企業側でも、資本主義的な発想だけではなく、芸術・文化に対する思いや取組が必要であろうし、そのためには、国民側がそのような企業を評価するという価値観が構築されることが求められる。そのような風潮が浸透する中で、例えば、企業による開発プロジェクトの際に、文化や環境への配慮を求めることなども検討が必要であろう。

（3） 都市・産業・文化政策の融合による都市の再生

文化政策が都市政策や産業政策と結びつけられた例としては、スペインのビルバオにおける取組が挙げられる。

スペイン北東部、バスク地方の首都ビルバオは、かつて、鉄と造船業の町として20世紀半ばまで大いに栄えた都市であった。しかし、それらの重工業は徐々に衰退し1970年代後半には環境破壊と25%を超える失業率を抱え、さらに1983年には旧市街地を大洪水が壊滅的に襲うなど、多くの問題を抱える都市であった。

しかし、ここからビルバオの新時代への挑戦が始まる。

1988年には、有名な建築家に地上エントランスと構内のデザインを依頼したメトロが完成し、現在は年間8，000万人近い利用者を記録している。これと同時期に列車の路線の再計画も行われ、倉庫や工場などが立ち並んでいた地区については、再開発するために線路が撤廃された。また路面電車も2002年に開通している。

再開発計画は、一人の建築家がマスタープランを描き、すでに10年以上に亘り開発を指揮しており、文化施設、商業施設、ホテル、住居など多くの建築物が、国際色豊かな様々な建築家の設計により、次々に建築されている。

この地区内に、1998年、それまでの熱心な誘致活動の結果、アメリカの建築家の設計によるユニークなデザインのグッゲンハイム美術館が完成する。この美術館は、開業初年度には140万人以上が訪れ、海外からの見学者も65%を占め、ビルバオの年間観光客数は50万人を超える状況になっている。

ビルバオの成功は、「グッゲンハイム効果」と呼ばれることもあるようであるが、単に美術館の誘致ということにとどまらず、優れたマスタープランの下で、都市政策・産業政策・文化政策が見事に融合した結果、かつての産業都市が、新たな魅力を持つ都市として再生した事例である。

（4） 協働を通じた新たな文化の創造

ここで、新潟県十日町市周辺の越後妻有、及び、瀬戸内海に位置する香川県の直島の事例を見てみたい。

越後妻有では、「大地の芸術祭」が開催されている。山と川、棚田と美しい集落の点在する760km² という広大な地域において、多数のアーティストが作品を制作し設置するプロジェクトが行われている。「大地の芸術祭　－越後妻有アートトリエンナーレ2006－」のホームページから経緯やコンセプトを抜粋する。

「時代のパラダイムシフトを見据え、地域に内在するさまざまな価値をアートを媒介として掘り起こし、その魅力を高め世界に発信しつつ自律へ向けた道筋を築いていこうというものでした。「アートはひとつの、しかし強力な方法である」。アートの場を見せる力、場をよみがえらせる力、人と人、人と土地をつなげる力によって地域は少しずつ元気を出してきています。2000年にはさまざまな協働が生まれ、2003年には祭りの予感が生まれました。自律する展望をもち、楽しく元気が出ることをやっていくことを手始めに、地域の再生を目指すことが大地の芸術祭の大きな目的です。」

「1000年ものながきにわたり農業を通し大地とかかわってきた越後妻有の景観・生活・コミュニティは四季の変化に彩られた山河によって育まれた日本の原風景、心の故郷とでも言うべき典型的な里山として、雪深き上越国境の向こうに、静かに、深々と存在しています。」

「谷間の美しい集落の家で毎週活けかえられる日本いけばな界総出演の精華。5軒が生をつむぐ山間の空き家に設えられた陶の名人たちによる土の結晶。山の塊に沈む夕陽を望む峠に屹立する彫刻。池に張り出した周囲の風景を映し込む能舞台。そこに通っていた子どもたちを幻出させる

廃校の美術館。商店街の空家に展開される現代美術の粋。それらを旅する喜びは、足から伝わる土の感触、木々をわたる風の爽やかさ、濃密な草いきれとともに私たちの五感を浸し、開かせ、生の素晴らしさを全身に蘇えらせると思います。そして夕暮れ、里山巡遊の末に辿りつく宿での旨い食事と酒、温泉。妻有を巡る旅は、恐らく今までに味わったことのないマジカルミステリーツアー、はたまた歓喜の遊行。」

長い伝統を持ち、地域に愛着を持つ人々にとって、当初は、「よそ者」が入ってくることに対する抵抗はかなり強いものであった。しかし、２，０００回を超える説明会の開催などを通じ、過疎中山間地での農業従事者たるお年寄りと、都会の学生・アーティストという、地域、世代、ジャンルが全く違う人の“協働”がうまれ、新たな文化がうまれてきた。都市の人間が越後妻有について熱心に議論し、自分の生まれた場所ではないところに新たな故郷をつくり出している。

瀬戸内海に位置する香川県直島は１９７０年ごろから島の人口が減少し続けている。

この島はかつて、鉱業が盛んな島であったが、島々の木々は精錬に伴う煙害でほとんど枯れて禿山となっていた。

ある企業が、この島を文化的な場所にしたいという強い思いから一帯の土地を購入し、一人の著名な建築家の構想の下、島の再生に取り組んだ。植樹活動を通じた自然再生、島全体を使った現代美術の展示、無人の古民家を保存・再生し現代美術の展示場とするプロジェクト、施設全体を全て地下に埋め、島から美しい海を眺めることができるように考慮された地中美術館の建設などを通じて、直島独自のプロジェクトには国内外からの注目も集まるようになった。

島の伝統的なくらしを継承しつつ、現代美術という従来とは異なる文化が取り入れられた結果、新たな文化がうまれた例である。

将来の文化を培う人材を育む

- 大人が子どもと対等な目線に立ち、様々な機会に、子どもの頃から本物の文化に直接触れる機会をつくることが重要である。その取組を通じて豊かな感性が磨かれ、将来の日本文化を担う子どもが育つ。
- 熱意とリーダーシップを有する人、集団、組織の存在が必要であり、その人たちに委ねる、という哲学を人々が受け入れる必要がある。
- 優れた建築物などは、優れた建築家・デザイナーと優れた技術者・職人などが揃って初めてできあがるものであり、技術者・技能者を育成する必要がある。
- 新たな文化を切り拓くには挑戦は不可欠である。挑戦しようとする人に機会を与え、支援することが必要である。
- 行政側には、NPO などを信じて任せるという姿勢が求められている。
- 民間が文化を支援しやすい環境づくりが求められている。

（1） 次世代を担う子ども

国づくり・人づくりの基本は子どもである。

大人が「こうしなさい」「子どもはこうあるべき」というのではなく、大人と子どもは対等であるという目線で、大人と子どもとが直接対話することが重要である。そして、本物の経験させることである。親が、美術館や音楽会に子どもを積極的に連れて行くことはもちろんであるが、美術館・博物館サイドにも、本物をみんなに見せたい、という熱意をもった対応をすることが求められている。金沢２１世紀美術館では、設計段階から、設計者と美術館学芸員とが、美術館とはどうあるべきか、どうしたら多くの人に来てもらえるのか、ということについて徹底した議論を積み重ね、その

結果、利用者にとっても学芸員にとっても、さらにアーティストにとっても利用したい美術館が完成した。

子どもの時から本物に直接触れるという経験は子どもの精神的成長にとって不可欠である。本物に触れること、贅沢な経験をすることは、本物に対する憧れにつながる。

文化とは五感に訴えるものであり、本物に対する憧れ、本物を素晴らしいと判断することのできる感性は文化を培う基礎ではなかろうか。

自分が住んでいる地域に何があるのか、その地域の誇りや魅力について、地域が総がかりで子どもたちに教え込み、地域の大人と子どもが共に学び、地域のアイデンティティを確立することも必要である。地域の魅力の基本は、住民が地域に対して抱いている誇りと愛着であり、それは、子どもの頃からの教育によってうまれる。

子どもたちが日常生活を送る学校のあり方も再考しなければならない。例えば、学校建築についても立派な建築家による文化的に素晴らしい校舎をつくりそこで実際に体験させること、校庭をすべて芝生にしたり学校周辺に植樹をしたりして現実の自然環境に触れさせること、学校の授業の中でも本物の芸術・文化に触れる機会を増やすこと、等々の取組ができないだろうか。

（2）“目利き”の育成とリーダーシップ

現代のように価値観が多様化し、多くの関係者が複雑に関わり合っている世の中にあっては、変えられるもの、と、変えたくないもの・変えるべきではないもの、についての判断は難しい。総論賛成各論反対、という風潮も強い中で、社会にいい意味での変化をもたらすためには、多数決による解決ではなく、強力な熱意とリーダーシップを有する人、集団、組織の存在が必要である。

景観は、ナショナルトラストにみられるような、地域住民が育んできた伝統的な街並みや居住

環境の保全、自然と一体になった歴史的風土の保全といった、無秩序な乱開発からの保護という意味合いに加え、臨海副都心の再開発のように統一的なデザインによる新興の景観を形成する事業など新たな都市空間形成を含む概念である。景観の美的観念は多くの人々に共有されるべき公共性を持つ概念であるといえ、したがって、景観の保全・創出は、個々人の自由な発想に委ねて勝手に創意工夫が施されていくものではない。熱意とリーダーシップを持った“目利き”に委ねる、という社会環境の整備が求められている。

（3）優れた技術者・技能者の育成

近年、土木や建築の分野で、高い技術・技能と熱意のある人々が現場から離れる傾向にある。厳しい仕事の現状とそれに対する見返りの少なさが一因だとされている。また、和の文化を支える伝統芸術、伝統工芸の、いわば匠の技、ともいうべき技術・技能を持っている人たちの高齢化が進み、その技の継承が困難になりつつある現状もある。

我が国では、国際的に見ても極めて高い評価を得ている建築家・デザイナーが数多く輩出されており、国内には、建築や土木の分野で、その人たちの手による素晴らしい作品も数多く存在する。それらの作品は、単に建築家・デザイナー一人の力でできあがるものではない。数多くの優れた土木・建築の技術者がおり、また大工や左官などの熟練した職人がいて初めてできあがるものである。このように優れた技術者・技能者を育成することも重要な課題である。

（4） 挑戦への支援

現代の若者は、ファッション誌などにより、手本となるような人のファッションやライフスタイルを真似たり、今一番何が人気があるのか、何が売れているのか、というランキングを見て商品を購入したりする傾向にある。自分に自信がないためか、自分の判断ではなく、ロールモデルや大衆の判断に委ねている。

自信を持ち、自らの価値判断が出来るようになるためには、いろいろなものに触れ、自分なり

に考え、失敗も成功も含めた様々な経験を積むことが必要であろう。ところが、最近は、子どもの頃から、あらかじめ用意された道を踏み外そうとせず、挑戦せず、失敗した経験もないため、社会人になっても、間違えること、自らの意見を伝えることを極端に嫌がり、そこから逃げようとするという人が多くなってきている。

Google での取組は、できることは何でもやる、という精神が現代において非常に大事であることを示している。文化でも科学技術でも、これまで、従来の価値観を疑い、あるいはそれを超えるため、新たな事柄に挑戦することで新たな分野が切り拓かれてきたはずである。可能性が少ないから挑戦する、挑戦したら失敗もするということを身をもって知ることは極めて大切であり、挑戦しようとする人にその機会を与え、支援することが重要である。

（5） 行政のあり方

さきに述べた大地の芸術祭は、760k㎡に及ぶ広域に作品を点在させて展開するプロジェクトであり、最大の情報を最短で得るという効率性を重視する現在の価値観とは相反するものである。また、事業の実施過程でも、説明会の開催や関連する道路の整備などの事業を実施するに当たっては、徹底的に非効率を貫く、という考え方の下に実施されたプロジェクトであった。

芸術を考える上で非効率は重要な意味を持つ。文化には効率性では測れない価値がある。行政の基本的な考え方としては安全性などを考慮し、それを規則化することから始まるが、芸術は既存の価値を打ち壊していくことから始まる。また、芸術とは、趣味的、個人的な性質を有するものであり、総意を得ることが前提とはなっていない。それが総意を得て一般化された場合には、デザインであり土木であり計画になってしまい、まったく性質が異なるものとなる。

行政と芸術との間に存在する、価値判断の基準の差異を検証する必要がある。その差異を踏まえて行政としてどのように行動するかが、これからの文化を培う上で重要なポイントとなる。

「新たな公」による文化芸術政策が推進されていく中では、施設の運営などにも公的主体だ

けではなくNPOが関与する機会も増加する傾向にある。また、遊休地や歴史的建造物などを活用したアートセンターなど、柔軟で創造的な動きがNPO主導によりうまれつつある。文化芸術施策の担い手として、今後さらにNPOの活躍が期待されるが、その際に、行政は、白紙で委任すべきではない。行政側の意思を明確に伝え、その後は信じて任せる、という対応が重要である。行政側の職員も、机上の勉強ではなく、実際に本物に触れる経験を積むことが必要であり、その上で、行政の意思を具体的かつ明確にNPOに伝えることも可能となり、両者の信頼関係がうまれてくるのではないか。行政サイドにも文化政策に関する専門家が必要である。

個人が自らの財産を、文化施設を建設するために地方公共団体に寄附しようとしたところ、「そのような形で寄附を受けると、必ずしも寄附者の意向に沿った施設を建設できないおそれがあるので、自らの思い通りに建設し、できあがった施設を寄附して下さい。」といわれたというエピソードがあった。これからの文化を経済的に支えるのは、行政のみならず企業や個人である。企業や個人が、芸術・文化に対して寄附などの支援をしやすいような環境をつくることも重要である。

行政が経済的な支援を行う場合、まんべんなく総花的に支援を行うよりも、対象を絞り込んでそこに集中的に資源を投資し、「本当にやった」という成功例をつくり上げることが重要である。行政側の支援メニューも多種多様なものが用意されているが、地方公共団体側で使いこなせていないのではないか。

また、まちづくりを実施した後、一定期間を経て事後評価を行い、実際に地域がどのくらい活性化されたのか、地域住民の満足度がどのくらい向上したのか、ということを評価することが必要である。そして、良くなったというところに重点的に支援するというシステムを検討する必要がある。

文化と国土交通行政

文化を培うこれからの国土交通行政を考える懇談会　座長

慶應義塾大学教授　村上周三

（1） 地球環境問題と文化

２１世紀に入って、地球環境問題は一層深刻化している。その原因を探れば、２０世紀の大量生産、大量消費型の文明に行き着く。このような状況において人類は新たな文明のパラダイムを構築することを求められている。

２０世紀の物質信奉型の文明が破綻した以上、次のパラダイムが脱物質文明となるのは当然のことである。問題は、２０世紀の物質的価値観に代わる新たな価値を何処に見いだすかということである。「脱物質」のあり方には様々なものが考えられるが、その中核となる新たな価値として、「物質」に代わって「文化」を位置づけることができる

文化を中心に据えた新しい文明の下で、大量生産、大量消費のパラダイムを克服し、省資源、省エネルギーを図りながら新たな価値観に基づくライフスタイルを生み出し、脱物質型の豊かな生活を構築することが可能である。これは、地球環境時代の新たなパラダイムを提供するものであり、同時に国土交通行政の将来にも新たな展望を与えるものと言える。

（2） ここで取り扱う「文化」の枠組みについて

文化という言葉は多義的、包括的で様々の意味に用いられる。しばしば用いられるものは芸術活動などに関連して、「人間生活における芸術的、知的活動やそれらの活動が生み出す生産物」という定義である。いわゆる文化財の文化はこれに該当する。人類学や社会学の枠組みの中で用いられる「文化」は、「ある集団に共有される態度・信念や慣習・風習や価値観」を

表す。この二つの定義は、互いに排除しあうものではなく、重なる場合もありうる。

ここでは、国土交通行政との関わりという観点から文化について検討する。従って「文化財」の系統の文化は主なる対象にはならず、主として後者の、地域のコミュニティに着目した「集団のアイデンティティを規定するもの」という意味で文化という言葉を用いる。すなわち、日本各地に重層的に存在する様々なコミュニティを形成するメンバーによる、生活の仕方の理念ということができる。京都文化、大阪文化、あるいは下町文化、山の手文化などである。ただし、地域における芸術活動や文化財保護運動などのように、後者の活動の中に、前者が含まれることもある。

このような定義に基づく、文化を形成するための自己のアイデンティティの決め方は、そのまま日常の生活の仕方（Way of Life）の枠組みの構築につながる。

（3） グローバリゼーションと文化

地球環境問題とは文脈を異にするが、現代文明の最大の特徴の一つとしてグローバリゼーションを指摘することができる。ICT を基盤とするグローバリゼーションは地球上のあらゆる空間を均質で連続なものにしつつある。しかしそれは代償として、各地域が伝統的に育成・継承してきた固有の地方性や伝統文化の存在を希薄なものにしつつある。このような状況は、絶滅危惧種に倣って、集団に固有の文化の持続可能性の危機ということができる。固有文化は絶滅危惧種と同様、人類にとって極めて貴重な資産である。

一方、世界の均質化を進めるグローバル化に対抗する新しい動きとして、失われつつある集団の伝統や地域性を再認識しようとする逆の力学の存在を指摘することができる。逆らいがたいグローバリゼーションの波に流されつつある多くの現代人は、集団の一員としても、個人としても、自己がよって立つ基盤を見失うのではないかという不安を抱いている。その結果、改めて自己が帰属するコミュニティに、意識の共有やアイデンティティのより所を求める動きが盛んとなりつつある。これは上で定義したように、文化を求める行為そのものといえる。

近年日本の各地でみられる伝統芸能尊重の動きは、グローバル化時代における自己のアイ

デンティティを、地域文化を通して再確認する動きと捉えることができ、文化の持続可能性を求める自律的運動と位置づけることができる。すなわち、それぞれが住んでいる都市、地域、地方において、伝統的な生活の仕方（Way of Life）そのものを再評価し、それにより所を求めようとする動きで、生活文化の再構築と呼ぶにふさわしい状況が発生しつつある。

（4） 文化と国土交通行政

地域文化はまさに国の資産であり、これが消滅することは、国にとっての大きな損失である。上記のように、グローバル化の逆のベクトルとして指摘される自己規定のありかたとしての文化に係わる新しい動向は、ローカル文化の見直しという形で、日本のみならず世界的な傾向として指摘することができる。先進各国は地域競争力向上の視点から、競って文化資産の保全に力を入れている。

このような生活の仕方（Way of life）の再ローカル化の傾向が徐々に顕著になりつつある状況において、国土交通行政も、文化資産の保全や広義の地域振興という観点から、これを支援することが求められている。このような文化資産の保全は幅広い波及効果も持つもので、世代間交流、観光産業の振興など、地域の社会・経済の活性化に大きな貢献を果たし、同時に新しい文化の創造にも寄与するものと期待される。実際、既に成功した幾つかの事例を指摘することができる。

従って全国でその兆候が見られるようになった、帰属する集団を通して自己のアイデンティティを求める動きは、全国の自治体やこれらに係わって重層的に存在する各種コミュニティの、今後の方向を決める重要な自律的運動と位置づけられる。これらを支援して広く連携させることが出来れば効果は一層大きくなり、新たな社会資本整備の枠組みを提供することになり、国土環境の維持・管理・経営に大きな波及効果を及ぼすものと想定される。従って国土交通行政に係わる施策展開において、文化資産の保全やそれを踏まえた新文化開拓の観点からこの動きに十分な配慮を払う必要があるといえる。豊かな文化資産を持ちながらも、その保全活動が十分に展開されていない地域に対して、自己のアイデンティティの確立という目標を掲げて文化

をテコにしてコミュニティの自律的振興を図ることは、グローバル化や過疎化の波に対して危機感を抱いている多くの自治体に、新たな発展のための刺激を与えることができるものと考えられる。

このような文化資産の保全や新文化開拓を通して地域振興を図る枠組みを行政手法として体系化し、国土や社会資本の再整備手法を構築することは、グローバル化時代における国土交通行政の新たなミッションといえる。

＜資料1＞

「文化を培うこれからの国土交通行政を考える懇談会」 メンバー

座　長　　村上　周三　　慶應義塾大学教授

座長代理　西村　幸夫　　東京大学大学院教授

上村多恵子　　（社）京都経済同友会常任理事

上條　典夫　　（株）電通消費者研究センター局長

コシノ・ジュンコ　　ファッションデザイナー

篠原　修　　政策研究大学院大学教授

蓑　豊　　金沢21世紀美術館特任館長、大阪市立美術館名誉館長、

サザビーズ北米本社副社長

（敬称略・五十音順）

＜事務局＞　国土交通省総合政策局環境・海洋課

国土環境・調整課

＜資料2＞

「文化を培うこれからの国土交通行政を考える懇談会」 開催経緯

【第1回】　平成18年11月20日（月）10：30～12：30

◆開催の趣旨

◆国土交通省におけるこれまでの取組

◆自由討議

【第2回】　平成18年12月13日（水）13：00～15：00

◆プレゼンテーション

・上村　多恵子　氏（（社）京都経済同友会常任理事）

・上條　典夫　氏（（株）電通消費者研究センター局長）

・　蓑　豊　氏（金沢市助役、金沢21世紀美術館館長、大阪市立美術館館長）

◆意見交換

【第3回】　平成19年1月22日（月）10：00～12：00

◆プレゼンテーション

・川勝　平太　氏　（国際日本文化研究所センター教授）

・茂木　健一郎　氏　（ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー）

◆意見交換

【第4回】　平成19年2月15日（木）10：00～12：00

◆プレゼンテーション

・北川　フラム　氏　（アートフロントギャラリー代表取締役）

・吉本　光宏　氏　（ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室長）

◆意見交換

【第5回】　平成19年3月29日（木）13：00～15：00

◆プレゼンテーション

・林　望　氏　（作家）

・ドラ　トーザン　氏（ジャーナリスト・エッセイスト）

◆意見交換

【第6回】　平成19年4月18日（水）13：00～15：00

◆プレゼンテーション

・大賀　典雄　氏　（ソニー相談役（元名誉会長）、指揮者、
東京フィルハーモニー交響楽団会長兼理事長）

・内原　智史　氏　（ライティングデザイナー）

◆意見交換

【第7回】　平成19年5月22日（火）15：30～17：30

◆プレゼンテーション

・安藤　忠雄　氏　（建築家、東京大学名誉教授）

◆意見交換

【第8回】　平成19年6月13日（水）10：00～12：00

◆中間とりまとめ案について

◆意見交換

（プレゼンテーターの肩書きは、その当時のもの）